

# ●観察者と保育者の対話(4)

## 観察者から保育者へ

一月三十一日(水)

小日向台町幼稚園で観察を始めて、もう四年目になりますが、三歳児を腰を据えて見るのは今年度が初めてです。毎回、子どもたちの発想や矢継ぎ早に展開する遊びの様子に、驚かされたり感心したりしながら、新しい発見や多様な気づきを経験しております。

きょうは、天気もよく、暖かかったこともあります。ほどの子どもたちが外に出していました。一学期から、S君やK君は、まず部屋で“武器(ヒーローになるための道具)”を作つてから外に出て、三輪車に乗りながら戦いごっこをする様子がよく見られました。しかし、最近はお互いの戦いごっこに対するイメージの違いに二人とも気づき始めているけれども、それをお互いに伝え合つて、新しい動きやストーリーを開拓することまではまだ

うまくいかないのか、どこか単調でおもしろさに欠け、不完全燃焼になってしまつてているように感じています。きょうも、S君はいつもと同じように武器を持つて三輪車に乗つていたのですが、途中で地面に仰向けに寝転がつていて、どこか所在なさげであるように見えました。

そんな中、先生が砂場に入つて数人の子どもとスコップで地面を掘り始め、しばらくして山を作ることになりましたね。途中からS君やはかの子どもたちも砂場に誘われるようにやつてきて、最終的には多くの子どもたちと一緒に大きな山を作り上げていきました。私から見て、大きくて、姿形も富士山のように格好良い魅力的な山でした。

山を大きくするために、ギュッギュッと土をスコップで固めて一回り小さくしたり、上から白い砂で雪を降らせてみたり、その時に友達に砂がかかるないように「かけまーす」と言つたり、大きな山を作ることで子どもたちはいろいろな経験をしていましたように思います。無情にも、お片づけの時間がきてしまつたのですが、子どもたちの「こわしたくない」「続きをしたい」という思いもあって、「こわさないでください」という旗を作つて山頂に立てるようになりました。

## 保育者から観察者へ

一月三十一日（水）

S君は今、友達関係や遊び方の変わり目にあるように思っています。今まで、自分の思いと同じように動いた友達が自分の思うように動かなくなりました（当たり前のことですが）。そのため、S君は一つの壁に当たっているのだと思います。私はいつも友達と一緒にいることで安定していたS君が、友達はいつも自分の思うようには行動しないことや、友達にも考えがあることに気づいてほ

先生が積極的にかかわって、子どもたちだけでは少し難しい大きな山を一緒に作っていたからこそ、そこに惹かれてS君たちも集まってきたのだと思います。山を作ることになつたきつかけまではわからなかつたのですが、先生としては何か意図があつたのでしょうか。また、次の日はどのような展開が見られたのでしょうか。

お片づけ前にトンネルを掘りたがつていたけれども、思いがかなわなかつたH君は、どうなつていたでしょうか。

しいと思つています。また、この機会に自分が熱中できるものを見つけてほしいと考えています。「ぼくはこれが大好きなこと」と言える遊びを見つけてほしいと思つています。そこで今、私はいろいろな遊びを提示しているところです。砂場の遊びもその一つです。S君は入園当初は砂場に近寄ることも少なく、手に少しでも砂がつくと、すぐに手を洗いに行く、という状況でした。二学

期半ば、徐々に砂場に入つてくるようになり、少しづつ遊びの積み重ねをする中で、砂遊びの楽しさを感じ始めています。

この日は、数人の幼児が砂場で型抜き遊びをしていました。

した。その横で四歳児が山を作りかけていました。途中で四歳児はいなくなり、小さな山が残っていました。以前、四歳児が大きな山を数日かけて作っている姿を見て、憧れを感じていた三歳児の一人がその小さな山を見て「ゆりさんみたいなお山を作りたい」と言うと、傍にいた数人が同意し、山作りになりました。憧れから自分たちもやってみたい、という思いがでてきました。私はその思いを大切にしていきたいと思い、一緒に山作りをしました。砂遊びはいろいろな発見ができる遊びの一つだと思います。S君には砂遊びのダイナミックな楽しさ

を感じてほしいと思っています。また、みんなで一つのものを作る、それで充実感を味わえるようになつてきただのが、この時期なのだと思います。今回はその機会になつたと思います。

翌日、中学生のボランティアのお姉さんが砂場で一緒に遊ぶことになりました。そこで初めて「あれ、山がなくなつてている!」と数人が気づきました。おかしいな、

と言ひながら中学生と一緒に山を作り、トンネルを作つて遊ぶことができました。S君、H君ももちろん、ほかの友達も一緒に作ることができました。

## ふたたび観察者から保育者へ

二月七日（水）

三歳児にとつては一日一日がそれぞれ特別で、毎日新しい世界に飛び込んでいくようなものかもしれないです

ね。しかし、子ども自ら、「前日の遊びの続きをする」という明確な目的をもつて登園し、前日の遊びを次の日

につなげていくことはまだなくとも、あの山作りが子どもにとつて一つの大切な経験だったからこそ、砂場に行つた時にハツと思い出す子どもがいたのでしようね。

きょうは子ども会（生活発表会）のリハーサルで、部屋の様子も、いつもどいぶ違いました。後ろには、いすがずらつと並び、いつもあるおままごとや絵本コーナー、工作コーナーもなく、そこは「てぶくろ」の舞台に変わっていました。子どもたちは「見せる」というはつきりとした意識はなくとも、お辞儀をしたり、大勢の人の前で何かをすることはもしかしたら入園以来、初めての経験だったのではないでしょうか。

印象に残ったのは、先生の指示が特別にあつたわけではないのに、ねずみになつて一番最初にてぶくろに入つたUちゃんとTちゃんが、ほかの動物がてぶくろに入つてくる時に、友達が入りやすいように入り口を二人で開いて持つていた姿です。状況を理解して、自然と仲間のことも気づいて思いやる二人の姿から、育ちをはつきりと見取ることができたように思います。また、おじい

さん役の先生がてぶくろを探しに戻つて来た時、「てぶくろならここにあるよ！」と多くの子どもが落ちているてぶくろを指差して、先生に大きい声で教えていましたね。H君はてぶくろから飛び出て、落ちていててぶくろを拾つて先生に渡そうとしていました。

日常の遊びや生活から完全に切り離し、特別な状況を設定して劇を見せようとするのではなく、日々の流れの中に子ども会が自然に位置づけられているからこそ、きょうのような少し非日常な状況であつても、先生と子どもが自然に応答し、子ども一人ひとりが無理をすることがなく、多少興奮しつつも、日々の遊びや生活の中で積み重ねたものをさまざまなかたちで素直に表現できていたのだと思います。とはいっても、同じ空間や時間を作り共に有つくり上げていく子ども会のような行事は、やは



り、子どもにとつても、普段の遊びとは違つたどこか特別なものでしあうね。先生にとつても、子ども会はもちろん特別なものだと思います。このような特別な状況だからこそできる子どもの経験があり、先生の側でも新し

い気づきがたくさんあつたのではないかと思いますが、先生の子ども会への思いや、一連の子ども会にまつわる子どもの姿を通して新たに発見されたことなどあればぜひお聞かせください。

## ふたたび保育者から観察者へ

二月七日（水）

リハーサルを手伝つていただいて、ありがとうございました。想像していたよりも『お客様さんが来ていい』ということに対してもおじしない子どもたちで私も驚きました。

確かに、普段の生活の中で、ぬいぐるみの『お客様』の前でお辞儀をして歌を歌つたり、楽器を鳴らしたりしていました。

前でも役になりきつて動いたり、歌を歌つたりした子どもたちのたくましさに驚きました。

三歳児にとっての子ども会は、子ども本人がいつもの遊びと同じような、楽しめるものをねらっています。保

護者に見せるためでも、お客様さんに見せるためでもなく、普段の遊びと同じようになりきつたり、歌を歌つたりすることを楽しむことを大切にしています。子ども会も、遊んでいる様子をたまたまおうちの人が見てくれて、それがうれしい、と感じるような雰囲気をつくりたいと思いました。

子ども会の劇遊びの題材は、子どもと一緒に読んだ絵本で楽しめたものを選びました。登場人物（動物？）は年間を通して、子どもたちがなりきつて遊ぶことを楽しんでいたものでした。ですから、きょうのリハーサルもいつもとは雰囲気が違う保育室ではあるけれど、遊びに

使つて いた 小道具を 設定 し まし た。なりきつて 遊ぶこと  
が 好きな 子どもたち は、たちまちお面をつけて 動き出 す  
と、Aちゃんが「ここはでぶくろのお家つてことね」と  
言い、しまつて いたまま」と道具を 出して きて、いつも  
のよ うに 場を つくり 始め まし た。この姿が三歳児の姿な  
のでは ないかと 思い まし ます。

また、劇のストーリーを 絵本や ペーパーサートなど で 繰  
り返し 楽しんで いたので、話の 盛り上がりが わかり、そ  
の タイミングを 楽しめる 姿が ありました。だからこそ、  
皆の 気持ちが 一つになつて お話を 作る こ とが でき たのだと  
思ひ まし ます。

人前での 緊張感 の 中で、自分なりに 表現する こ とを 楽  
しんで いく、とい う 経験は、この「子ども会」とい う 中  
で味わう こ とができる 大切な 経験の 一つである と 思い ま  
す。「お家の 人に 見て もらつた」とい う 喜びや うれし  
さ、「できた」「やつた」とい う 感情を 三歳児なりに 味わ  
い、快感情を もてた のだと思ひ まし ます。

十月の運動会では母親から離れられなかつた子ども  
が、子ども会当日は離れて自分の役になりきつて表現を  
楽しんでいました。運動会も子ども会も大勢の人の前で  
行動する活動ですが、今回の子ども会で子どもが安心し  
て活動できた要因を考えると次のようなことが考えられ  
ました。

①場が保育室で慣れていたこと。  
②言葉のやりとりなど、劇遊びそのものが楽しかつたこ  
と。  
③人に見てもらう“晴れがましい”体験に喜びを感じる  
ようになつたこと。

などが挙げられます。

子どもたちが皆楽しめて、「また、やろうね」とい う  
言葉が出た こ とが、何よりも よかつた と 思い まし ます。

観察者　横井絃子（お茶の水女子大学）  
保育者　前田宏子（小日向台町幼稚園）